

ニナリマス敬語について

本 多 啓

1 はじめに

本稿では、たとえば顧客に領収書を手渡すときなどに用いられる

(1) こちら領収書になります。

に現れるような「になります」の用法を取り上げる。

このような「になります」の用法は、日本語として不自然な表現とされることがある。その理由の一つには、元来主語の指示対象²⁾の状態変化を表す動詞である「なる」が用いられているにもかかわらず、主語は変化していないことにある。たとえば(1)においては、手渡されるものは手渡される以前から領収書と呼ばれうるものであり、別種の紙が手渡された後に領収書に変化するということではない。

もっとも、変化を表さなくても不自然とはされない「になります」もある。

(2) a. こちらが若鶏のプロヴァンス風になります。

(NHK アナウンス室ことば班(2005: 63))

b. こちらが和風セットになります。

(矢澤(2004: 31))

(2a)については、「メニューで料理名をみただけでは予想がつかない、不確定なものを指して言う場合には、さほど違和感がないかもしれません」という観察(NHK アナウンス室ことば班(2005: 63-64))がある。また(2b)については、矢澤(2004: 31-32)は次のように述べている。

(3) 「お客の予想から外れるかもしれないが」という断りを添えて、「こちらがその和風セットである」ことを表したものです。自信満々に提供するのではなく、「これで、はたしてお客様のご期待に添えるかどうかわかりませんが」という謙虚な姿勢を示すこともできますし、仮に、客の予想から外れたとしても、その客

だけ特別扱いしているのではなく、それが既定の「和風セット」であることも示されます。店側としては、客に気配りをして、「こちら和風セットになります」を用いているのです。

この2つの観察をまとめると、客が予想できないものが提示される場合には、変化が表されなくても「になります」が不自然とされなくなるというわけである。これらの観察が妥当であるかどうかは別として、少なくとも本稿で問題にする(1)のような例は、この条件を満たすものではない。(1)は実例であるが、この場合、領収書を渡されることは聞き手の予想の範囲内であり、また領収書の書式、記載内容等についても同様であった。

また、(1)のような表現はある種の丁寧さを表すものであり、さらに主としてファミリーレストランやコンビニエンスストア(および居酒屋、ファーストフード店など)の若い店員が用いるものとされているため、「ファミコン敬語」などのように呼ばれることがある。「若者の言葉の乱れ」の一つとされることもある。

現実には、この種の表現はその「不自然さ」にも関わらず、きわめて広範に用いられている。使用される場面および使用者も、ファミリーレストランやコンビニエンスストアなどで働く若い店員に限られるわけではない。実際、(1)は、ある大学の図書館で、そこに勤務する常勤職員から発せられたものである。また、これに類する用法は、テレビの報道番組で用いられることもあれば、大学主催の教務関係の行事で教員が学生に対して語りかける言葉の中に出てくることもある。

以下、本稿では、このような「になります」に関して、「どのような表現効果を持つのか」「誰が使っているのか」「どのような場合に使われるのか」についての筆者の見解および観察を提示し、それを踏まえたうえで、このような用法が「どのようなしくみで生まれきたのか」についての仮説を提示したい。

なお、本稿ではこの用法が日本語の「乱れ」に当たるかどうかについては一切問題にしない。言語の現状に関して、それがあべき姿にあるかどうかを(何らかの恣意的でない基準に則って)評価することは、それなりに意味のある態度かもしれない。しかし、一般に理論言語学者の学問的な関心は、言葉の現状に関して、「なぜそのような状況が生じたのか」を明らかにすることにある。

たとえば、リンゴが落ちるのを見たときの反応として考えられるものの一つとして、「頭に当たったら危険だから、落ちないようにしてほしい。または、落ちてでも危険でないように、りんごの木を柵などで囲んで人が入れないようにしてほしい」と要望す

る、というのがありうるだろう。そしてこの反応が、それなりに意味のある反応であることを、筆者は否定しない。しかしながら、同じ現象を見て、「なぜリンゴは落ちるのだろう。そもそもなぜ、モノは落ちるのだろう」という疑問を抱いて探求を開始する、あるいはその疑問に対する解答となりうる仮説を思いつく、ということにも、意味はあると考えられる。本稿の立場は後者に近いものである。

ただし、この種の「になります」の用法を実際に使用したり容認したりする話者が存在する一方で、「不自然」と感じて容認しない話者もいることは事実である。本稿では、このような容認可能性の差についても言及する。

2 どのような表現効果を持つのか

まず、この「になります」の用法がどのような表現効果を持つかについて考えたい。先に述べたように、一部の日本語話者にとってはこの用法は奇異に響くようである。そのような話者にとっては、「それではどのような言い方をすればよいのか」が問題になる。そこで本節では、2つの代替表現と比較することで、この用法の表現効果について考えたい。

先に述べたように、この用法は「丁寧さ」を表すとされており、それについては筆者も賛成する。そこで次の3つの文について、丁寧さとの関係から考えてみることにする。いずれも、レストラン等で店員が客に対して注文されたカレーを手渡すときの発話とする。

- (4) a. こちらカレーライスです。
- b. こちらカレーライスになります。
- c. こちらカレーライスでございます。

丁寧さの観点から見ると、(4a)に対する反応は、2つに分かれる。すなわち、(4a)のような通常の「です」体の使用で丁寧さは十分ないし「ちょうどよい」と感じる話者がいる一方で、通常の「です」では「丁寧さが足りない」と感じる話者もいる³⁾。そして後者の感じ方には、それなりの合理的な根拠があると思われる。それは通常の「です」の使用は、実は店員が客と対等の立場に立つことを意味するからである。このことを検討するために、店員に向けた客の発話としての、次の表現を考えよう。

- (5) a. これ何が入ってるの？

b. これいくら？

(6) a. これ、何が入ってるんですか？

b. これ(お)いくらですか？

(ニナリマス敬語を使用する世代と、その少し上に当たる)20代から30代の客がレストラン等で店員に話しかける際に、「です」のない(5)のような言い方をすることは稀であると考えられる。通常は(6)のように「です」のついた形式を用いると思われる。かりに(5)を使用すれば、「苦情を申し立てている」「精神的に未成熟」などの印象を与えることにもなりかねない。

したがって、逆に店員が客に対して通常の「です」体で話しかければ、それは店員が客と同じ形式で話すことになる。すなわち店員が言葉の上で客と対等の立場に立つことになる。これを是とするか非とするかについては個人の感じ方による違いがあるであろう。是とする話者は「です」体を「ちょうどよい」と感じることになり、非とする話者は「丁寧さが足りない」と感じるようになる。そして、非とする話者は、「です」体とは異なる表現形式を求めることになるわけである。

一方、(4c)の「ございます」であるが、これをこれをファミリーレストランやコンビニエンスストアで使用することに抵抗を感じない話者もいる⁴⁾。しかし他方で「高級店であればまだしも、ファミレスやコンビニで使うには堅苦しすぎる」と感じる話者がいても不思議ではない⁵⁾。

(4b)の「になります」に関して言えば、客が店員に対してこの種の表現を用いることは事実上ないと言ってよい。したがって、(4a)のような通常の「です」体とは異なり、店員は客とは違う言葉を話すことになり、対等という関係は成立しない。他方、(4c)の「ございます」のような過度な堅さもない。そのような位置づけで、この表現は用いられているようである⁶⁾。

3 だれが使っているのか

先に述べたように、この種の用法は一般にはファミリーレストランやコンビニエンスストアなどの若い店員が(主に)用いるとされているが、現実にはより広範に用いられている。以下にその例を挙げる。すべて筆者自身が観察した実例である。

(7) 〈授与〉に伴って用いられた例

- a. こちら領収書になります。 (= (1); 2005年6月, 大学図書館職員)
- b. 英語1の採点表はこちらになります。 (2005年1月, 大学教務課職員)

この2例は、モノを相手に渡すときに用いられたものである。ここではかりに「〈授与〉に伴って用いられた例」あるいは単に「〈授与〉の例」と呼ぶ。これらはいずれも大学の常勤職員(年齢は30代)による使用例である。(7a)は、領収書を手渡しするときに口頭で言われたものである。(7b)は、採点表に添付された手書きのメモからの引用である。

(8) 〈提示〉に伴って用いられた例

- a. これが偽札のコピーになります。(2005年1月26日, 日本テレビのニュース)
- b. 資料の〇ページになります。(2004年10月, 大学教員2名, ゼミ紹介)
- c. 確定申告会場は長野県自治会館になります。(2005年2月, 長野市内)
- d. (参考) 確定申告会場は長野県自治会館です。(2005年2月, 長野駅)

この3例は、モノを相手に見せるときに用いられたものである。ここではかりに「〈提示〉に伴って用いられた例」あるいは単に「〈提示〉の例」と呼ぶ。(8a)は偽一万円札が使用される事件が頻発した時期のテレビ報道からの引用である⁷⁾。画面には偽一万円札のコピーが大写しにされていた。(8b)は、学部学生を対象とした専門演習の説明会で、全教員が順番にそれぞれの演習の内容を説明した際に、若手教員(年齢は30代)2名が使用したものである。2名のうち1名は外国語教育を担当し、もう1名は日本文化論を専攻している。いずれも良識ある人文系の研究者である。また(8c)は確定申告の時期に長野市内の善光寺に行く道にいくつか置かれていた立て看板に書かれていたものである。なお、長野駅に掛けられていた横断幕では(8d)のように「です」体が用いられていた。

以上から言えることは、丁寧語としてのニナリマスは、〈授与〉だけでなく〈提示〉に伴う例も含めてみるならば、ファミレス・コンビニ等に限らず、相当広範囲に用いられているということである。そして使用者の中には、大学の常勤職員や、人文系の大学教員も含まれているのである。

4 どのような場合に使うのか

すでに見たように敬語としてのニナリマスは状態変化のない主語に用いられてい

るため、丁寧さの違いを度外視するならば「です」と交換可能である。しかしながら、すべての「です」が「になります」で置き換え可能というわけではない。そもそもニナリマス丁寧語として使うことそれ自体に対して抵抗を感じる日本語話者がいるのも確かであるが、それとは別に、ニナリマスを容認する話者の間でも、この用法にははっきりした制約がある。

たとえば(4b)の「カレーライスになります」は、店員が客に対して使うことは可能だが、テーブルの店員に近い位置に座っていて、店員からカレーを受け取った客が、テーブルの奥の方に座っている、カレーを注文した客にそのカレーを渡す場合(つまり、店員から客への発話ではなく、客から客への発話)に使うと不自然と感じられる。その場合、「カレーライスです」は可能であるが、「カレーライスになります」は不自然なのである。また(1)の「こちら領収書になります」も、図書館職員が利用者に対して使用することは可能であるが、かりに別の利用者を介して領収書が渡された場合、仲介役の利用者が最終的な受取人の利用者に対して、「領収書になります」と言いながら領収書を手渡すのは不自然と感じられる。この場合も「これ領収書です」のように「です」体であれば使用可能である。

前節で取り上げた、丁寧語としてのニナリマスに〈授与〉と〈提示〉の用法があることとあわせてまとめると、この用法は次の場合に可能になることができる。

- (9) 自分が職務上管理責任を持つものを相手に授与または提示するとき。

5 どのようなしくみで生まれてきたのか

それでは、このような丁寧語としてのニナリマスは、どのようにして生まれてきたのであろうか。

これまでしばしば主張されてきたのは、「マニュアルにそのように記載されている」という考え方である。しかしこの考え方にはいくつかの難点がある。

まず、かりに実際にマニュアルにそのように記載されている(記載されていた)としたら、それではマニュアルを作成した人物は、なぜこの言い方をマニュアルに採用したのが問題となる。つまり、「マニュアルに書いてあるから」という考え方は、問題を解決するものではなく、単に別の次元に先送りするものに過ぎない。

第二に、実際にコンビニエンスストアで働く店員を観察すると、レジでの行動の仕方(たとえばつり銭の渡し方、レシートを渡すかどうか、など)は、同じ系列の店舗でも完全に統一されているわけではない。つまり、恐らくはマニュアルに記載されてい

るであろうと想像されることであっても、一致しているとは限らない。要するに、マニュアルに記載されていても、店員が全員何から何までそれにしたがって行動するとは限らない⁸⁾。したがって、実際の業務の細目においては、個々の店員の記憶および判断に依存する面がかなりあると想像される。だが、ニナリマス敬語にはそのようなばらつきはない。

また、この用法の成立の背後には、アルバイト店員が敬語を十分に習得していないことがあると言われることもある。それが「若者の言葉の乱れ」と結びつけられるわけである。しかしながら、「習得の不十分さ」という考え方は、「なぜこのような一見不自然にも見える言い回しが各地で一様に用いられるようになったのか」という疑問に答えることができない。

したがって、ニナリマスが丁寧語として用いられるにいたった背後には、マニュアルに書かれているとか、若者の敬語習得が不十分であるとかいった理由以上の、より自然な動機づけがあると考えられる。本稿の以下の部分は、この動機づけを明らかにすることを目標とする。

その動機づけについての本稿の仮説の要点を簡単にまとめると、次のようになる。

- (10) 「なります」には、「(計算すると)お釣りは 100 円になります」のような用法がある。これが釣銭を渡すときに頻用された結果、「〈モノ〉になります」という言語形式が、〈モノ〉を渡すときに用いられる表現として定着した。

この言い方は店員が業務の一環として客に対して一方向的に用いるものであり、客が店員に対して用いることはない。このことから、この言い方が業務上の言い方として確立し、丁寧表現と解釈されるようになった。

以下、「なる」の状態変化を表す(通常(?)の)用法とニナリマス敬語とのつながりを明らかにしながら、この仮説をやや理論的な言葉も用いて精密化してみたい。

主語の状態変化を表す「なる」の例としては、たとえば次のようなものがある。

- (11) オタマジャクシはカエルになります。

この「なる」は真理条件的な意味⁹⁾を変えずに「です」に置き換えることはできない。たとえば(11)と(12)は意味を異にする。

(12) オタマジャクシはカエルです。

次のような「なる」は、一見状態変化を表すようには見えないかもしれない。

- (13) a. 100 円のお返しになります。
b. お釣りは 100 円になります。

現にこの「になる」は、「です」に置き換えても同じ状況を表すことができる。

- (14) a. 100 円のお返しです。
b. お釣りは 100 円です。

しかしながら、実はこの「なる」も状態変化を表すと考えることができる。ただし、ここで言う「変化」とは、(11)の場合のような現実世界における変化ではなく、話し手および聞き手の認識世界における変化である。このことは、(13b)で言えば次のように表現を補うと明らかになる。

(15) 計算すると、お釣りは 100 円になります。

「計算する」という行為の結果、釣銭の額が話し手・聞き手の認識世界の中において、〈未知〉ないし〈未確定〉という状態から「100 円」という確定した状態へと変化するわけである。

このような例の場合、計算を行う責任を負うのは話者である店員である。したがって、「変化」を引き起こした原因ないし責任は店員にある。また同時に、店員は釣銭を管理する責任、およびその釣銭を客に渡す責任も負う。

(11)の「なる」から(13)への「なる」の拡張は、Sweetser (1990)の言う実質領域 (content domain)から認識領域 (epistemic domain)へのメタファーの例になる。

同じようなメタファーの例として説明できるものに、たとえば次の「はいる」の用法がある。

- (16) a. 太郎が部屋に入る。
b. クジラは哺乳類にはいる。

(16a)が現実世界における主語の移動を表すのに対して、(16b)は認識世界における移動を表す。調査などの結果、クジラが〈未知〉ないし〈未確定〉の領域から「哺乳類」の領域に移動するわけである。

そしてニナリマス敬語である。本稿は、丁寧語としてのニナリマスは、(13)のような用法に関連づけられると考える。ただしそのつながりはメタファーではないと考える¹⁰⁾。

以下に仮説を提示する。

ニナリマス敬語について、道浦(2003: 205)は次のように述べている。

(17) おそらくこの「なります」口調は、レジで代金を計算するときと言うセリフ、「オムライスとカレーで 1800 円になります」からきているのではないのでしょうか。

これも「1800 円です」でもよいのですが、「なります」と言うと、「ちゃんと計算したところ、そうになりましたよ」というニュアンスが感じられます。

断定を避ける言い方はこんなところにもあったのですね。 (強調原文)

本稿の立場は、基本的にはこの引用の強調部分に近いものである¹¹⁾。具体的には、この見解を認知言語学の考え方¹²⁾を用いて精密化したものに相当する¹³⁾。

話者が店舗のレジ等において(13)のような表現に(客などとして他者の発話を耳にしたり、あるいは店員として自ら発話したりすることで)繰り返し接触することにより、話者の知識構造において、次のような構造(構文スキーマ)が(13)から抽出されて成立する。

(18) [金額] になります

また、(13)が使われる場面に繰り返し立ち会うことから、話者の知識構造において、レジにおける一まとまりの出来事ないし行為の連鎖についての知識構造(スクリプト)が抽出される。そして、その一部としての、次のような出来事ないし行為が、(18)の構文スキーマに関連づけられる。

(19) 店員が客に [金額] の釣銭を渡す

以上を短くまとめてしまえば、次のようになる。

(20) 「[] 円になります」という表現が、店員がその金額の釣銭を客に渡す(授与)する際に用いられる表現として固定化する

なお、(18)+(19)すなわち(20)からなる知識構造においては、その基になる(13)に伴う次のような知識構造が保持される。

- (21) a. 話者である店員は、釣銭を計算する責任、釣銭を管理する責任、およびその釣銭を聞き手である客に渡す責任を負う。
b. 店員が話者、客が聞き手であり、その逆ではない。店員は業務の一環として発話する。

(21b)から、ニナリマスが店員専用の業務上の表現となり、ここから業務上用いられる丁寧表現としての位置づけが生じると考えられる。

「になります」という表現形式から合成的に予測される意味には〈授与〉という概念は含まれないので、(20)においてすでに形式と用法の乖離は始まっている。しかし(20)は(13)が使われる場面に実際に存在する要素を抽出したものに過ぎないため、違和感を感じる話者は少ないと思われる。

次に、(20)が〈店員による客への釣銭の授与〉から〈組織に所属する人間から外部の人間への、管理する事物の授与〉に拡張する。これにより、構文スキーマ(18)から(22a)が生じ、知識構造(19)からは(22b)が生じ、知識構造(21a,b)から(22c,d)が生じる。

- (22) a. [モノ] になります
b. 組織に所属する人間甲が外部の人間乙に業務の一環として [モノ] を渡す
c. 話者である甲は、モノを用意する責任、管理する責任、およびそのモノを乙に渡す責任を負う。
d. 話者である甲は、業務の一環として客に対して発話する。(ニナリマスは業務上用いられる丁寧表現である。)

このような拡張により、次の〈授与〉の例が成立することになる。

- (7) a. こちら領収書になります。
- b. 英語1の採点表はこちらになります。

これは、(18)+(19)すなわち(20)を直接の基盤として成立したものである。(20)が(13)からの抽出として生じたという意味でこれと直接に結びついている一方で、(22)および(7)はそれとは間接的なつながりは持つものの、直接のつながりは持たない。このことから、ニナリマス敬語の容認性評価のばらつきが説明されることになる。

〈授与〉のニナリマス敬語((7))は、背後に(22)という知識構造を持つ。これは、

(23) [22] ⇒ [18] + [19] すなわち [20] ⇒ [13] ⇒ [11]

という形で主語の現実世界における状態変化を表す「なる」とのつながりを持っている。すなわち、ニナリマス敬語の成立には動機づけがあり、そのためこれを容認する話者が存在することになる。

他方で、ニナリマス敬語の直接の基盤をなす知識構造(22)においては、「になります」の形式から予測される意味の構成要素としての〈変化〉の概念は含まれていない。そこで、ニナリマス敬語においては、要素の合成から予測される意味と実際の用法との間に大きな乖離が生じることになる。そのため、現段階ではこれを容認しない話者もいるというわけである。

〈提示〉の用法も、同様のメカニズムによって、認識世界における変化を表す「になります」から生じたものと考えることができる。

- (8) a. これが偽札のコピーになります。
- b. 資料の〇ページになります。
- c. 確定申告会場は長野県自治会館になります。

ここまで述べてきた過程は、(13)のような発話が行われる状況であればどこでも生じる可能性がある。したがって、本稿の議論は「なぜこのような一見不自然にも見える言い回しが各地で一様に用いられるようになったのか」という間に答えることも

きる。

最後に、このニナリマス敬語のように、スクリプト的な知識が合成表現を支える知識構造に取り込まれ、その結果合成表現が全体として、部分の意味の総和とははなはだしく乖離した用法を持つにいたった類例として、次の例を挙げておきたい。

(24) おはよう(ございます)。

この表現は、敬語表現を取り除いて書き直せば「早い(です)」となるわけだが、現代日本語においては両者はまったく異なる使われ方をしている。現在では、「おはよう(ございます)」は一日の中ではじめて会った人に対して(時間が早いか遅いかの区別なく)用いられる表現となっている。これは、「職場/学校に着いてから職場/学校を出るまで」ないしは「職場/学校で仕事/勉強を始めてから仕事/勉強を終えるまで」という、行為を基盤とした一日概念に基づく表現となっているわけである(本多(1998))。

6 おわりに

以上が、ニナリマス敬語の成立過程についての筆者の仮説である。

ニナリマス敬語と同様に、俗にファミコン敬語と呼ばれ、そして同様に容認可能性に関して議論を引き起こしている用法として、次のようなタの用法がある。

(25) ご注文は以上でよろしかったですか。

このタも、ニナリマス敬語と同様、丁寧さを表すものとされている。

しかしながら、ニナリマスとこの種のタは、どちらも丁寧さを表すものでありながら、相互に入れ替えることは不可能である。

(26) a. こちら領収書になります。

b. * こちら領収書でした。

c. * こちら領収書になりました。

d. ご注文は以上でよろしかったですか。

e. * ご注文は以上でよろしくなります(でしよう)か。

f. * ご注文は以上でよろしくなりました(でしよう)か。

この背後には、ニナリマスが丁寧さを表すメカニズムと、タが丁寧さを表すメカニズムが異なるという事情がある¹⁴⁾。

これらは一般にはどちらも一律にファミコン敬語として括られてしまいがちなものであり、そしてときに「若者による敬語習得の不十分さ」あるいは「若者の言葉の乱れ」として一様に忌避されることもある。

しかしながら、ある表現が広まるにはそれなりの理由がある。そしてその理由は「若者の言葉の乱れ」などとして一様に処理できるものではなく、各表現に固有のものであり、真剣な学問的検討に値するものである。本稿でその一端を示すことができれば幸いである。

註

- 1) 本稿の内容は、本学における 2005 年度「現代文化フォーラム」における講義内容を理論的に精密化してまとめ直したものである。また、準備段階で、筆者担当の「言語文化論入門」の受講者を対象に簡易調査を行った。両講義の受講者諸氏の協力に謝意を表したい。また、事例の使用を許諾して下さった関係各位にもお礼申し上げます。
- 2) 以下、煩雑になるのを避けるため、「主語の指示対象」を単に「主語」と呼ぶ。
- 3) 読賣新聞(2003年10月23日)参照。筆者自身による簡易調査でも反応は大きくこの2つに分かれた。ただし、「丁寧すぎる」という回答もごく少数ながらあった。
- 4) 実際、学生はあまりいないが、しかしさほど高級とはいえない居酒屋で、店員に「ございます」を使用させているところもある。
- 5) 筆者の簡易調査でも、回答は「ちょうどよい」と「丁寧すぎる」の2つに大別された。「丁寧さが足りない」がごく少数あった。
- 6) 「です」「になります」「でございます」の3つの表現についての丁寧さの位置づけについては、本稿と同様の観察が井上(2004)に提示されている。
- 7) 読賣新聞(2003年10月23日)にこれと同様の「若手アナウンサー」による使用例が言及されている。
- 8) 筆者の簡易調査では、同じ系列のコンビニエンスストアで働いているものの間でも、勤務時の言葉遣いに関する質問(選択肢式、複数回答可)に対して、「マニュアルに書いてあるのでそれに従う」の選択肢を選んだ学生と選ばなかった学生がいた。
- 9) 筆者は認知意味論者であり、真理条件的意味論を支持するわけではないが、真理条件が意味に関係することを否定するものでもない。

- 10) 佐藤(2005)は丁寧語としてのニナリマスを、(11)のような現実世界における変化を表す「なる」の用法から発話行為領域へのメタファー(Sweetser (1990)の用語で言うならば、実質領域から言語行為領域(speech-act domain)へのメタファー)によって成立したとしているが、その根拠は必ずしも明らかではない。たとえば、メタファーにおいては写像のありようが重要になるが、佐藤の議論では写像の構造が述べられていない。また、佐藤の議論では認識領域と言語行為領域の両方に該当するニナリマスの例が取り上げられているが、かりにそのようなものが存在するとすれば、「2つの目標領域(target domain)をもつメタファー」という理論上の問題が発生するはずであるが、佐藤の議論にはこの問題への言及はない。
- 11) 「断定を避ける言い方」という(日本語についてのステレオタイプに流されたとも見える)見解については筆者は支持しない。
- 12) 以下の議論の基盤にある考え方は Langacker による使用依拠モデル(usage-based model; Langacker (1988, 2000), 早瀬・堀田(2005))と, Traugott による語用論的富化(pragmatic enrichment)である。これらの考え方についての予備知識がなくても以下の議論の理解には支障ないはずであるが、本稿に関連する範囲で簡単にまとめておくと、次のようになる。
- (i) a. 言語能力を構成する知識(言語知識)は、言語使用(話す・聞く・読む・書くのすべてを含む)によってつねに更新され続けている。したがって言語のあり方は、個人のレベルでも共同体のレベルでもつねに変容にさらされている。また、言語知識には同一の共同体の中でも個人差がある。
- b. ある言語形式がある環境において使われ続けていると、(もともとその言語形式それ自体のもつ意味・用法でなかった)環境の属性が、言語形式それ自体の持つ意味・用法の一部と捉えなおされることがある。これが言語の変化の一つの原因となる。
- 13) なお、道浦が言及している「(ちゃんと計算したところ,)オムライスとカレーで1800円になります」は(13)と同様の用法の例である。
- 14) この種のタの用法については、筆者の見る限り、加藤(2004)が最も優れた見解を提示している。

参考文献

- Langacker, Ronald W. (1988) "A Usage-Based Model," *Topics in Cognitive Linguistics*, ed. by Rudzka-Ostyn, Brygida 127 -- 161, John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (2000) "A Dynamic Usage-Based Model," *Usage-Based Models of Language*, ed. by Barlow, Michael and Kemmer, Suzanne 1 -- 63, CSLI Publications, Stanford (坪井栄治郎訳(2000)「動的な使用依拠モデル」(坂原(2000: 61 -- 143))).

- Sweetser, Eve E. (1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*, Cambridge University Press (沢田治美訳(2000) 『認知意味論の展開 --- 語源学から語用論まで --- 』研究社出版).
- 井上史雄(2004) 『近ごろ気になる敬語のはなし』, 日本放送出版協会(NHK日本語なるほど塾 2004年11月号).
- NHK アナウンス室ことば班編(2005) 『ことばおじさんの気になることば』, 日本放送出版協会.
- 加藤重広(2004) 『日本語語用論のしくみ』, 研究社.
- 坂原茂編(2000) 『認知言語学の発展』, ひつじ書房.
- 佐藤琢三(2005) 『自動詞文と他動詞文の意味論』, 笠間書院.
- 早瀬尚子・堀田優子(2005) 『認知文法の新展開 --- カテゴリー化と用法基盤モデル ---』, 研究社.
- 本多啓(1998) 「「今年」とはいつのことか」. 『駿河台大学論叢』 16, 185 -- 193.
- 道浦俊彦(2003) 『「ことばの雑学」放送局 --- 「新語・造語・迷用法」をアナウンサーが楽しく解説』, PHP 研究所.
- 矢澤真人(2004) 「こちら～になります」. 北原保雄編『問題な日本語 --- どこがおかしい? 何がおかしい?』 30 -- 34, 大修館書店.
- 読売新聞(2003年10月23日) (2003) 「「です派」対「なります派」. 読売新聞「新日本語の現場」197, 2003年10月23日, <http://www.yomiuri.co.jp/katsuji/news/nihongo/0197.htm>).